

『書の心』(三)

これらの一群の外国文字の書風を、異質の筆、異型の執筆法で書き写すうちに、別に趣きを創造したりその創造力がさらに別種な文字の造形にも及んでくることを考えてみると、漢字の中の仏教関係の書などには多少の興味ある例が存在する。

漢字の書が日本に輸入されてきた当座は、法隆寺の広目天像のような筆の執り方が正式な型であったのだろう。それがだんだん日本的書風といったものを完成してくると、いつの間にかわれわれの祖先は自分達の書を作るのに相応する筆の持ち方に変えてしまったに違いない。

平安時代の人達の筆の持ち方と今日のわれわれの持ち方はあまり違わないから、平安のころには日本的執筆法といったものが確立したものであろう。

これはもう少し詳しくお話ししないと、ちよつと飛躍し過ぎるかも知れないが、書がその他国から輸入した当座は、その技法一切が他国の型に依る必然性を持つけれど、それが定着してその国民の風趣に適するものが自然に発達してくると、当然技法の中にある型にも必要による移り変わりが出て来て、渾然一國の書風創造に協力する形をとるのである。

実はこの現象の分子が個人にあるのを思うと、法を手に入れる時期には模倣に終始し、理解ののちその本然の性格に合う創造をする時に至つて、型の脱化がみずから行われ簡有の美を建設してやるものと見てもよいのではなからうか。

書が今日のこの生活の変貌、社会機構の改革の中で、多少の動きを示して非文字性の書などというものも出てきたり、ペン、ボールペンの美術をとという構想も潜在している。

何でも生活に適うものだけが生命を保つのである。この原則の中

で書が実用と芸術との二股をかけて、この後どうあらねばならないか、いつのいかなる時代になつても、またいかなる書を創造して書くようになって、鍛錬の究極の中に打ち出してきたものは、過去にえりみても光を持つのではあるまいか。そしてまたその創作の基盤となるものは何かに考え及んでくると、自分などは少々心細くなるのを禁じ得ない。

門外漢であるわれわれが見ていると、宗教の世界も無理な創作を加えて、手薄出来な新興教団の強引な押しに、既存の完成大教団が守勢に立つつかの観がある。

こういうことが、既存のものに新しいものを加えて人間社会の流れを凝視し、どうも適往してやまないというような不転の気魄に欠けてきたこのごろの私どもに、激動に耐え新しい建設へ進めるような心の糧を供給していただけたら、また一段の有り難いことだがと念じてやまないものがある。

『筆間雜記』中村素堂隨筆集昭和六十三年刊より転載。

〔大法輪〕、昭和四十五年十二月

